

2021 (R3) 年小論文コンクール (テーマは「文」) の応募総数は 170 編 (2020 年は 401 編、テーマは「幸」) でした。応募いただいたみなさん、ありがとうございました。

日本では、小学校のうちには読書感想文などで文章を書く機会がありますが、中学、高校と進むにしたがってまとまった文章を書く機会が減ります。また、スマートフォンや SNS が普及して、メールの内容も形式も話し言葉とあまり変わらないものになってきました。ところが、高校卒業間近になると、入試や就職試験の小論文、志望理由書などが必要になりますし、大学進学後や社会人になってからは、レポートや卒業論文、ビジネス文書、挨拶状など、正式な文章を書く機会にあふれています。

岩手県立大学の小論文コンクールは、県内高校生のみなさんが書くことへの苦手意識を克服し、書くことの面白さを実感してもらう機会を提供するものです。文章をまとめるというのは、決して楽な作業ではありません。しかし、それは大学や社会の中で必要な作業であるだけでなく、その作業を通じて自分の考えを形作るという大切な働きも持っています。今回応募してくれたみなさんは、自分自身との対話を繰り返すことで、自分の考えが文章という見える形に発展したことに気づいたと思います。よりよいコミュニケーションのため、そして自分自身の成長のため、みなさんがこれからも文章を書き続けてくれることを願っています。

2021(R3)年、いわて高校生小論文コンクール 講評

作品の評価にあたっては次の 4 つの観点に着目した。

- ① 与えられたテーマ「文」に沿っているか。
- ② 表記、文章表現、文章構成は的確か。
- ③ 自分自身の経験、感覚、思考に基づいた論述となっているか。この点では、自身の生活体験に根ざした論述になっていることが望ましい。
- ④ 自分なりに論点を絞り込んで、論理的に分析や提言をしているか。

①について、今回のテーマ「文」からまったく外れた作品はなかった。しかし、例えば、「文化」という論点を立てて、日本文化などを論じている作品は少なくなかった。これでは「文化」を論じているとはいっても、「文」を論じているとはいえない。少なくとも、「文」と「文化」との関連について言及する必要がある。

②の表記については、全体としてよくできていた。パソコン入力原稿が多かったこともあってか、行頭に句読点を打ったり、閉じ括弧を書いたりというものもあった。禁則処理の設定をしておくべきである。

文章表現については、口語的な表現が混じったり、常体と敬体（「だ」「である」と「です」「ます」）が混じったり、主語と述語の関係がねじれたりといった例はあったが、多くはなかった。また、一読して意味の分からないような文はなく、全体としてよくできていた。敢えて言えば、一文を短かめに終わるよう意識した方がよいであろう。長くても 3 行くらいであろうか。文が長くなると読みづらくなりがちだし、主語と述語が呼応していない、いわゆるねじれた文にもなりやすい。ところで、文章表現を工夫するとき一般論として言えることは、形容詞や副詞をできるだけ使わず、それを具体的な叙述で表

すことである。子どもが感想を聞かれたときに「楽しかったです」「とてもよかったです」といった答え方をするのをよく見聞きする。文章として表現する場合には、どのように楽しかったりよかったりしたのか、あるいは「楽しい」や「よい」と言わずに楽しいことやよいことを読み手に伝えるにはどう書けば効果的かを考えるべきである。判断を迷うのが「見れる」「食べれる」のようないわゆる「ら抜き言葉」である。本来は「見られる」「食べられる」である。しかし、「見られる」「食べられる」には、受け身、尊敬、自発、可能という4つの用法があるのに対して、「見れる」「食べれる」は可能に絞られている的確な表現とも言える。

文章構成については、とりあえずは段落分けを意識するとよい。段落は内容的に一つのまとまりを持っている。どこからどこまでを一つの段落とし、前後の段落とどういう関係にあるのか（順接、逆接、例示など）をよく考えながら書こう。そのことで、文章全体の論理構成が明確になってくる。段落が多すぎて段落を分ける意味がほとんどなくなっている作品も見られたので、注意してほしい。1,200字ならば、4～6くらいの段落構成が適切であろう。また、論理的な文章を書くことに慣れないうちは、「したがって」「または」「しかし」「なぜなら」のような接続詞、「それ」「これ」「前者」「後者」「一方」「他方」「第一に」「第二に」のような指示や順序を示す語を意識し、多用すると論理的な文章になりやすい。もっとも、新聞の記事や社説を読んでも、このような語の使用は意外に少ない。つまり簡潔で読みやすい文章は、論理の流れがすんなりと頭に入ってくるので、接続詞や指示語を減らすことができるのである。

論述字数が少ない作品がわりと多かった。この小論文コンクールの場合は、字数が少なくても内容で評価されることはある。だが、試験の小論文の場合は、字数が少ないだけで失格となることもあるので注意しよう。最少でも制限字数の8割、できれば9割以上は書くべきであろう。

毎年のことだが、③で大きな差が出ている。文章でもスピーチや会話でも、その人独自の事例を取り上げた方が、読む人、聞く人は関心を持つ。事例と描写で独自性を出す方が、④の論理や主張で独自性を出すより容易である。なお、テレビや新聞でしばしば使われる「ストックフレーズ」（出来合いの文や言葉）を安易に使うのは避けたい。そうしたフレーズが、自らの生活実感や体験に照らして適切な表現なのかを立ち止まって考え、吟味してみよう。誰もが知っているフレーズというものは、実は誰にも訴えかける力がないのかもしれない。独自の事例がなく、だれでも知っている事例を使って論じる場合は、④がより重要になる。

④は論文やレポートでは必須である。ことに1,200字という限られた字数のこの小論文コンクールの場合、論点の絞り込みが重要である。いくつもの論点を取り上げては散漫な文章になってしまう。また、③で独自の事例を取り上げ、描写に工夫を凝らしたとしても、ただ叙述するだけでは作文とは言えても、小論文とは呼べない。論点を一つに絞り込んで、根拠を示し、反論も想定しながら思考を深めて行く必要がある。

今回のテーマ「文」は、文章を書くことそのものについて、根本に立ち返って考えてもらうために決定された。ただし、「ぶん」「ふみ」「あや」「もん」というように多様な読みや意味があるので、それに合わせて論述も多様であってよい。

以下は提出作品に多く見られた論点である。

- ・手紙や手書き文字の大切さ。
- ・活字離れ、文章離れ。
- ・名作（文芸作品）の価値。
- ・日本文化論。

ユニークな事例を取り上げて面白い文章もあった。例えば、矢文、入れ墨、波紋、縄文土器などである。昨年のテーマ「幸」に比べ、難度の高いテーマだったので応募作は 401 から 170 に減ったのであろう。だが、多様なイメージを喚起するテーマだったようである。

ところで、先に述べたように文化論を展開する場合は、少なくとも「文」と「文化」との関連について言及する必要がある。「文」は文字、文章、飾りなどの意味あり、それが「化」する、つまり変化するというのだから、「文化」とはもともとは知性が高まり、技術が進歩し、外形も洗練されていくことを意味するのであろう。そういう意味では「文化包丁」や「文化住宅」といった使われ方があったが、もはやほとんど聞かない。今では「文化」はもっと広い意味で使われることが一般的で、ある集団が共有する精神や行動のパターン全体を指す。例えば、日本文化、東北文化、若者文化などである。この場合は、もともとの「文化」の意味は薄れている。これは、異なる文化の固有性や対等性が強く意識されるようになり、様々な文化に対して進歩や洗練度という観点から優劣を判断することが避けられるようになったからかもしれない。

以下では、今回の入賞作品 8 編についてひとつずつふれる。なお、優秀賞の 2 作品と佳作の 5 作品に付されている番号は評価の順とは関わりない。

作品(1) (最優秀賞) 「文」の足音

今回の応募作の中でもっとも異質な作品である。「文」という文字の形から人が歩く姿をイメージし、「ぶん」や「もん」という読みを足音と重ねて考えている。これが何かの論点について論じた文章かという微妙ではある。だが、作品の最後の段落で「知れば知るほど非常に自由で、大切で、面白いもの」と書かれているように、文章を書くことの自由さや面白さを作品にしてみたことがよく分かる。

他者に何かを伝えようとするとき、約束事や形が大切なことは間違いないが、そればかりにこだわらずに、自由に自分の感性を表現してみることも忘れてはならない。例えば、形がきちんと整えられたビジネス文書は、意図は明確に伝わるだろうが、感動は伝わらない。「心地よい秋風が吹き抜ける秋天の候……」といった定型的な時候の挨拶から始まった手紙を読んで、共感がわくだろうか。この作品は、このような定型化を越えて、自由に「文」を書くことの楽しさ、素晴らしいを主張しているといえよう。

作品(2) (優秀賞) 人間だもの

「文」というものの意義を考えさせてくれる作品である。私たちは文章を書くとき、言葉を尽くして説明し、正確に理解してもらおうとする。書くことが上達するために、それは必要なことである。だが、そのことによって長たらしくてかえって分かりにくい文章を生んでいることもある。達意の文章は簡潔

である。無駄がないだけでなく、読者に行間を読み取らせてイメージを広げ、しかも、作者が意図することから大きく外れた解釈はさせない。相田みつをの『にんげんだもの』はその典型のように思える。人の頭の中にある思いは、複雑で不定形である。それを数少ない文字で表現するのが執筆である。この転換過程は簡単ではない。そのうえ、読者が筆者の思い通りに理解してくれるとも限らない。相田みつをの詩がこの作品の筆者を勇気づけているのは、達意の文章がもつ力ゆえといえよう。

作品(3) (優秀賞) 重要視されるべきもの

この作品は読みやすい。読み返さなくてもすんなり内容が理解できる。まず、随筆（エッセー）の基本型である起承転結で書かれているのが理由であろう。次に、父からの手紙という身近な事例が、読者にも共感しやすい。手書きの手紙の大切さについて論じる作品は数多かった中で、その代表作としてこの作品を選出した。ICT の発展によって、私たちは膨大な情報の海を漂っている。定型的な文章ならば AI が自動で生成してくれる時代になっている。そんな中では、手間のかかる手書きの手紙は貴重である。文章は、記号としての文字の集まりに過ぎないのだが、その記号としての意味以上の深く広い意味を伝えることができるのである。

作品(4) (佳作) 文が伝える力

この作品も作品(3)と同じく、文章（手紙）を書くことの大切さを論じている。作品(3)が手紙をもらう側に重点があるのにたいして、この作品は手紙を書く側に重点がある。第 3 段落に「自分の思いや考えを相手に伝えたい時、文章に書くと素直に表すことができる」とある。照れくさかったり申し訳なかったり、言いにくいことを伝えるときに手紙を書く場合、この一言はよく分かる。しかし、私の個人的に経験を言うと、手紙を書いたとき、なんとなく嘘をついているような、「こんなことをほんとに考えていたのだろうか」という違和感が残ることもある。この作品では、面会できないという状況下だから仕方ないのだが、会って話した方が気持ちが伝わることもある。話すことと書くことの両方が大切なことはいうまでもない。

作品(5) (佳作) 文が私を築く

この作品で一番注目すべきなのは「中学生になった私は、文章を書くという壁を乗り越えられずにいた」という一文である。本を読むことが大好きな子どもだったのに、文章を書けない。本はイメージを広げてくれる。実際に体験したことや、映像で見たこととは違って、文章は情報量が少ないので読者は自分で情報を補いながら理解している。読者は無意識に行間を読んでいるのである。この作者が読むことは好きなのに書けなかったのは、内に広がった世界を筋道立ててまとめる術を知らなかったからではないか。例えば、何か大切な体験や目標、動機などに的を絞りそれに肉付けするように考えをまとめていくと文章を書くことができる。

作品(6) (佳作) 文字が与える人々への役目

この作品のユニークな点は、点字という普段気づかれにくい文字に気づいたことである。文字は人に情報を伝えるためにある。東京オリ・パラリンピックでも注目されたピクトグラム（絵文字）などは、人々に広く分かりやすく的確に情報を伝えることが文字の役割であることに気づかせてくれる。点字も

文字であり、一般の文字と同じ役割を担っているはずだが、晴眼者はその存在にさえほとんど気づかない。同じ世界に生きているにもかかわらず、世界の見え方に大きな断絶が存在する。しかし、そこに橋を架ける可能性もあることも論じられていて、希望を抱かせる作品である。

作品(7) (佳作) 「文」がもつ意味とは

「文」という文字が意味することを、辞書的な定義を元にしつつ、自分自身で考察をめぐらせている作品である。その解釈は歴史的事実とは違っているのかもしれないが、一つの文字から想像が広がるのは楽しい。貨幣単位の文（もん）は、お金の受け渡しをコミュニケーションの一種と考えれば確かに文（ぶん）とつながりがある。そう考えると、現金を使う機会が減っている現代に一抹の寂しさも感じる。文（あや、彩、紋、綾）と読む場合、書道やカリグラフィーを思い浮かべると、文（ぶん）とのつながりが見える。「文（ぶん、ふみ、あや、もん）」をコミュニケーションという観点から統一的に解していることがユニークである。

作品(8) (佳作) 作文の役割

文章を書くという作業が自分自身にとってどういう作用を果たしているのかを的確に説明している作品である。自分が体験したこと、考えたこと、感じたことをそのまま書いても意味の通った文章にはならない。それは単なる文の羅列である。体験は頭の中で再構成され、構造化されて初めて意味を持ち、人に話すことができるのである。この構造化の作業は、頭の中だけではなく、書き出すことで高度化できる。これは、例えば数学の証明問題などを類推してみると分かりやすい。書くことで段階を追った思考ができるようになって難しい問題も解けるようになる。文章を書くことは、人に伝えるためだけではなく、自分自身の成長のためにも大切なことなのである。